第二　1907 年「癩予防ニ関スル件」

容貌の変化

浄瑠璃『弱法師』では、俊徳丸は自分の風貌を「人にもあらぬ我すがた、すくせ（宿世）いか成むくひぞや」と嘆き、「人のきたなむ違例をうけ」と、「癩」は人が汚がる病と捉えている。天王寺では、よろよろと歩く姿から「弱法師」とあだ名され、笑われる存在であった。そして婚約者露の前に再会したときも、彼女から「露のまへにてなきものが、此いれいしやにいだき付き、それとなのりてあふべきか」と、説経節『しんとく丸』の乙姫と同様のせりふを投げかけられる。

こういった「癩」による容姿の変化は、『摂州合邦辻』に至るまで各作品の中で描写されているのだが、俊徳丸が美少年であったために、それはいっそう際だつ。『摂州合邦辻』では、「あれ程美しい若殿様に、取付く病も多からうに、ひよんな事や」と使用人達が噂し、俊徳丸の姿は「癩病に色黒み、蛾蚕の眉も凧の、木の葉と散りて枯々の、御有様ぞいたはしき」と描写される。

美しい婚約者浅香姫の容姿とも比較される。天王寺付近の人々は、「美しい娘と癩病人（かったい）と、テモ木に竹といはうか、鉄棒に心天を継合した尋者」と語る。

前述のように、俊徳丸を天王寺まで尋ねてきた浅香姫にも、俊徳丸の変わり果てた姿にそれとわからない。「恋しき人はそこにとも、知らぬはかはる俤（おもかげ）の、顔もけやけき悪瘡の、臭気いかがと袖覆ひ」と、潰瘍の臭気を気にしながら、俊徳丸本人に向かって俊徳丸の行方を問う。俊徳丸は「現在の妻にさへ見違へられしはいかばかり、見る目いぶせくなりつらん、浅ましさよとどうと伏し」と、盲目のために自分の姿の変化を確認できないながらも、嘆く。

目の前の「癩病人」が俊徳丸だと知った浅香姫は、「痛はしや、玉を欺くあてやかな、お顔も手足も此様に、変れば変るものかいの」とまた嘆く。

俊徳丸を追って館を出た玉手御前に再会した俊徳丸は、今の姿を見せれば玉手の恋心も失せようと、玉手に向かって「今は見る目もいぶせき癩病、両眼盲して浅ましき姿は、お目にかからぬか」と述べる。

「癩」の描写は、説経節の段階から一貫してその容姿の変貌ぶりを強調する。それは人々の「癩」に対する忌避の背景に、外見に対する強い嫌悪があったからである。が、同時に、一連の作品が物語の演出として「癩」の症状を意図的に強調して表現し、そのイメージを流布させ、人々の「癩」への恐怖と嫌悪感を煽る役割を果たした側面も、考える必要がある。

演出された「癩」のイメージ

近世初期の説経浄瑠璃の時代から、しんとく丸をめぐる物語は、京・大坂・江戸の三都を中心に各地で繰り返し演じられてきた。観客に対してステレオタイプ化された症状を舞台上で視覚化して見せるだけではなく、「癩」が都の貴族の間では「穢れ」意識を持たれていたこと、「業病」・「天刑病」という言葉とそれにまつわる偏見、先祖の名を汚す不名誉な病であるという意識、業をさらせば治る可能性があること、医学的には親から受け継ぐ「癩」と「毒」による「癩」の 2 種類があると考えられていること、特定の日時に生まれた女性の生き血で治癒すること、そしてそのような残忍な薬でなければ治癒し得ない恐ろしい病気であるという認識などなどを、庶民芸能が人々の「癩」病観をくみ取りつつも、そこに巧みな演出を加えて、広く発信してきた事実は確認すべきである。